



# 現代アイルランド語詩歌の韻律と発音 : 綴り字aoの発音

菱川, 英一

---

(Citation)

文化學年報, 26:15-30

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001508>



# 現代アイルランド語詩歌の韻律と発音

## ——綴り字 ao の発音

菱川 英一

### 1. 問題の所在

現代アイルランド語の歌において日常語とは異なる特殊な発音が現れることがある。そのうち、特に綴り字 ao の発音についてその種の現象が起きることは夙に知られ、複数の言語学者が指摘している。

ところが、歌の実例が引かれることはなく、なぜ歌においてそうなるのかの理由も究明されていない。特に、マンスター（アイルランド南部）起源の詩歌をコナマラ（同西部）の歌い手が唄うときに頻繁に顕在化する問題だけに、実態の考察が重要である。<sup>1</sup>

綴り字 ao の発音はマンスター方言とコナマラ方言とで明らかに違うのに、その差異を覆してまで発音させるだけの力が詩歌にあるとすれば、その力の源泉は韻律にあると考えられるが、そうであるならば、韻律が消滅したと言われる現代アイルランド語詩にあって、韻律が生き続ける恐らく唯一の場が歌唱であることの証左となる。ただし、それは、韻律に意識的な理想的な歌い手を想定した場合のことであって、事態は楽観を許さない。アイルランド語話者はアイルランドにあって依然として減り続けており、過去の膨大な詩歌の遺産は理解されにくくなっている現実がある。

特に、ここで問題としている韻律は強勢詩の韻律であり、音節詩に比べて研究が極めて少ないこともあって、実態究明はますます肝要となる。問題を ao の発音に絞り、実例をもとに考証するのが本論の目的である。分析の中心はその実例（4.2、4.3）となる

### 2. 従来 of 学説

アイルランド西部コナハトで綴り字 ao が通常の発音 /i:/ でなくマンスター

1 背景として、17世紀後半から19世紀に至るまで、主要なアイルランド語詩歌は強勢韻律で作られており、傑出した詩人はマンスター地方に多いこと、一方、20世紀以降のアイルランド語芸術年次大会（エラタハス）の最高賞であるアイルランド語無伴奏歌唱の首位（現オリアダ杯）はコナマラ出身者が多いことがある。

流に /e:/ と発音される場合に歌の例が多いことは言語学者らにより縷々指摘されている。<sup>2</sup> が、なぜ歌においてその場合が多いかや、どのような歌に見られるかについては殆ど指摘されていない。指摘のうち、三例を取上げて見てみよう。

まず、オヒギンの指摘。

[maidir le ao(i) i gcanúint Chonnacht] is minic a chloistear /e:/ mar mhalairt ar /i:/ in amhráin srl.<sup>3</sup>

〔コナハト方言の ao(i) に関して〕しばしば、/i:/ に代えて /e:/ が歌などで聞かれる。

次に、ジェ・ワルドラへのコシュ・アーリゲ方言（コナマラ）の音声学的研究から引く。

In other words [than "aon", etc.] it is sometimes pronounced e: by certain speakers, but for the most part only in songs, or in unfamiliar words in stories, etc.<sup>4</sup>

〔"aon" など〕以外の語において時に〔ao(i) を〕 e: と発音する人もあるが、大抵は歌か、説話中の珍しい語などに限られる。

"aon"（一人〔の〕、一つの〔物〕）の他に、"craobh"（枝、棕櫚）なども、綴り字 ao を /e:/ と発音する有名な例外である。ジェ・ワルドラへは、こういう例外的な語でない場合で、ao を /e:/ と発音する人がいるが、それは歌や物語中の語などに限られることを指摘している。

最後に、オラヒリーの指摘。

2 アイルランド語には標準音がなく、北からドニゴール方言、コナハト方言、マンスター方言の三つに大別され、それぞれ発音体系などが異なる。コナハト地方のアイルランド語には主としてメーヨー方言とコナマラ方言とがあるが、本論文では専らコナマラ（コナハト南部）の方言を扱う。後で引用する Ciarán Ó Con Cheanainn はコナマラ出身。

3 Ruairí Ó hUiginn, "Gaeilge Chonnacht," *Stair na Gaeilge*, ead. Kim McCone et al. (Maigh Nuad: Roinn na Sean-Ghaeilge, Coláiste Phádraig, 1994) 546.

4 Tomás de Bhaldraithe, *The Irish of Cois Fhairrge, Co. Galway* (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 2002) 84.

Connacht verse (eighteenth-century, and folk-songs) seems to have *E:* at least as frequently as *I:*, so far as riming words containing *ao* are concerned.<sup>5</sup>

コナハトの詩（18世紀、および民謡）は、*ao* を含む押韻語に関する限り、*I:* と少なくとも同じくらいの頻度で *E:* が現れるように思われる。

ここで、押韻とは主として母音韻における強勢母音の一致を指す。

オラヒリーの指摘はオヒギンやジェ・ワルドラへより一步踏込んでおり、*ao* がコナハトの詩歌において /e:/ と発音されるのは、それが他の /e:/ 音と母音韻を成す場合であることを強く示唆している。

オラヒリーによると、*ao* の発音の現代における地域差は概して北で /i:/、南で /e:/ と言える。コナハトは北に属す。歴史的には、/e:/ のほうが古い発音で、/i:/ のほうが後代に発展したものとオラヒリーは主張している。

なぜコナハトで歌に /e:/ という発音が現れるかは、以上の指摘を踏まえるならば、大きな理由は韻律だと考えられる。また、ストーリーテリングなどに現れる古い語彙の場合は、古い言い方の保持という側面も考えられる。

### 3. 歌の発音

綴り字 *ao* が、歌において話者の方言とは違う発音をされる場合を考証するのが本論の目的であるが、*ao* に限らず一般に、歌においてその種の現象が起きることを、コナハトのラフタリー (Antoine Raiftearaí [Anthony Raftery], 1779-1835) の歌 ‘Máire Ní Eidhin’ を引いて確認する。パダル・オキャナワーイン (Peadar Ó Ceannabháin) が唄うヴァージョンの第3連を引く。その冒頭に現れる *eidh* の綴りの発音が問題である。詩脚を縦線で区切りコロンで句境界を表す（行の折返し箇所などの句境界は表示していない）。母音韻の箇所を太字で示す。原詩の後に母音韻の基本の型を示すが、その際、無強勢音節はハイフンで、行内休止はコロン二つで、韻を成さぬ強勢母音は小文字の *x* で表す。その後、逐語訳的英訳と日本語による大意とを添える。

’Sí | Máire Ní | **Eidhin** : an | chiúinbhean | bhéasach  
is | deise | **méin** : ’gus is | áille | gnaoi

5 Thomas F.O’Rahilly, *Irish Dialects Past and Present* (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1976) 28.

| Míle | cléireach : a | ghabháil in | éineacht  
 | trian a | tréathra : ní | fhéadfadh | scríobh  
 | Bhuail sí | Deirdre : le | breáichte is | Véineas  
 dá | n-abraínn | Héilean : ler | scriosadh an | Traoi  
 Seo'd | í an | chraobh : is cé a | d'iarrfadh a | héileamh  
 ar an | bpabhsac | gléigeal : 'tá i | mBaile Uí | Lí.<sup>6</sup>

(-) | x - - | é :: - | x - | é - :: - | x - | é :: - - | x - | í

Máire Ní Eidhin is the well-mannered, quiet woman  
 [with] the nicest disposition and the loveliest beauty  
 A thousand clerks working together  
 [that] could not write a third of her traits  
 She beat Deirdre in beauty and Venus  
 had I mentioned Helen for whom Troy was destroyed  
 This is the palm and who would try to claim it  
 on the pure white posy that is in Baile Uí Lí.

モーィラ・ニアインは上品で静かな女性  
 気立てよく、この上なく美しい。  
 千人の書記が把になって掛かっても  
 彼女の素晴らしさの三分の一も書けやしない。  
 彼女の美しさはデルドラやウェヌスに優った  
 もちろんトロイア傾城のヘレネーにも。  
 これぞ随一の美女であり、誰がその冠を  
 バリリーのこの純白の華から奪えようか。

モーィラ・ニアインなる女性を讃える著名な恋の歌である。ここでは行は折返して示してあり見かけ上は8行に見えるが、詩の形式としては4行連である。引用1行目に現れるその名 Eidhin はコナハトでは通常、/ain'/と

6 Peadar ó Ceannabháin, *Mo Chuid den tSaol* (Cló Iar-Chonnachta, 1997). 引用3行目の Deirdre の強勢母音はここでは母音韻に合わせて /e:/ と発音される可能性が高い。歌の旋律上はここは長い音符なので、いずれにしても /e:/ と聞こえる。古くは Déirdre の綴りもある。同行の abraínn は abair (言う) の接続法過去1人称単数形。同行の Traoi (トロイア) はアイルランド語では普通 Traí と綴る。引用4行目の seo'd または seod はコナマラでは seo に同じ (Lillis Ó Laoire の教示による)。同行の a héileamh の a は所有形容詞で、同行の an chraobh を指す。

発音される。したがって、女性名で /N'i: ain'/、男性名で /o: hain'/ などと発音される。この女性は英語では Mary Hynes と表記される。

ここで唄っている、コナマラはキル・ヒアランのオキャナワーインも普段はその発音に違いないのだが、この歌では /e:n'/ と、特殊な発音をしている。

その理由は、この歌の韻律を保持するためであると考えられる。一般的なことかと言えば、例えば、コナマラはカールナのショーサヴ・オヘーニー (Seosamh Ó hÉanaí [Joe Heaney], 1919-84) のような大歌手でも /N'i: ain'/ と発音していたと言われるので、これはコナハトの歌い手に一律普遍に見られる現象ではなく、オキャナワーインのような学者の歌い手、乃至韻律に意識的な歌い手に顕著な例と一応考えられる。

この歌の韻律は 1 行 8 強勢のオホトオクラハ (ochtfhoclach) である。すなわち、詩行を構成する 2 強勢ずつの句 4 つが 3A+B のパターンを成す。句末の母音韻は本連では é é é í と展開する (原詩の後の母音韻の型を参照)。引用 1 行目の第 2 詩脚、すなわち上述の Eidhin の強勢母音は、第 1 句の句末の母音韻を成す以上、/e:/ でなければならない。<sup>7</sup> 韻律を意識した歌い手は、綴り字 eidh に対する通常の発音 /ai/ を用いず /e:/ を採ることになる。

4 句を区切る句境界は三つあり、いずれも行内休止になっている。なお、強勢詩においては、行内休止は必ず句境界であると言えるが、句境界は必ずしも行内休止ではない。8 強勢オホトオクラハの行末詩脚は本詩のように 1 音節が圧倒的に多い。

## 4. ao の発音

### 4.1 コナハトの通例

綴り字 ao はコナハトでは通常 /i:/ と発音される。そのような実例としてコナマラの 'Tí Phádraic Con Rí' の第 1 連と折返し句とを引く。殆ど文献化されていない歌である。各連の 1 行目は唄う際に 3 度繰返される。

Bíonn | Pota mór | fataí : tí | Phádraic Con | Rí  
sé | pota na | leath-chloch : a | chuireann siad | síos.

Curfá: Ó|bhó mo | leanna : is ó|bhó mo | lao  
ó|bhó mo | leanna : is cé | déarfadh nach | í.<sup>8</sup>

7 一般に句末には標識として母音韻があり、句の他の位置の装飾韻と違って不可欠である。

8 Ciarán Ó Con Cheanainn (as Saile Thúna, Cois Fharraige, Co. na Gaillimhe), amhránaíocht, Áras Mháirtín Uí Chadhain, An Cheathrú Rua, 15 Lúnasa 2005.

-|o--|a--|x--|í  
 Curfá: -|ó-|a--|x-|í  
 -|ó-|a--|x--|í

There normally is a big pot of potatoes in Pádraic Con Rí's house  
 it is the pot of half-stone that they put down.

Chorus: Alas my dear and alas my dear  
 alas my dear and who'd say that she is not the one.

ポーリック・コン・リーの家にはジャガイモの大鍋がある  
 かけるのは半ストーン入る鍋だ

〔折返し句〕 ああ、ねえ、ああ、ねえ、  
 ああ、ねえ、誰が彼女じゃないと言うの。

4 強勢の行 4 つから成る連と 4 強勢の行 2 つから成る折返し句である。  
 ここに引いた箇所はたまたま連のほうの行末詩脚と折返し句の行末詩脚の  
 強勢母音が、同じ /i:/ で強烈な印象を与える。ナンセンスな文句から成る折  
 返し句の最初の行末の lao (子牛) はその /i:/ で発音される。<sup>9</sup> このように、  
 コナマラでは綴り字 ao(i) の標準音は /i:/ である。

#### 4.2 マンスターの歌の例

綴り字 ao(i) がコナハトで /e:/ と発音されるマンスターの歌の例として  
 ‘Jimmy mo Mhíle Stór’ の第 1 連を引く。2 行ずつのパタン 2 つから成る。

|Bliain an |taca seo, :|d'imigh uaim |rún mo |chléibh.  
 Ní |thiocfaidh sé a|bhaile : go |dtabharfaidh sé |cúrsa an |tsooil.  
 Nuair a |chífead é |rithfead : le |fuinneamh ró-|ard 'na |chomhair  
 Is |clúdód le |míl é, : 'sé |Jimmy mo |mhíle |stór.<sup>10</sup>

<sup>9</sup> ‘mo lao’ はここでは ‘my dear’ の意。

<sup>10</sup> Mar a dúirt Ciarán Ó Con Cheadainn. 別バージョンが次の 18-19 世紀詩のアンソロジーに収められている。Tomás Ó Concheanainn, *Nua-Dhuanaire*, cuid 3 (Baile Átha Cliath: Institiúid Ardléinn Bhaile Átha Cliath, 1981) 30. 同アンソロジーの註によると、古い歌ではないが、何世紀の歌かは不詳。文献上は 1884 年に初出例がある (*Irishleabhar na Gaedhilge Iúil* [1884])。

(-) | x - | a - - | x - - | ú - | é  
 - | x - - | i - - | i - - | x - | ó

A year ago, the darling of my bosom left me.  
 He won't return home until he's seen the affair[s] of the world.  
 When I see him I'll run with very high energy to him  
 And I'll cover him with honey, Jimmy is my dearest love.

一年前、恋人が私の許を去った。  
 世間を一通り見るまでは帰らないという。  
 彼の姿を見かけたら私は駆けつけ  
 甘いキスの雨を降らせよう、大事なジミーに。

5 強勢の詩行 2 つから成る二行連句を 2 つ続けた 4 行連である。各行は 2 句から成り、句の切れ目は第 2 詩脚にある。(行末を含む) それぞれの句末には母音韻が配されており、引用 1-2 行目の行末詩脚の強勢母音は /e:/ である(原詩の後の母音韻の型を参照)。すなわち、2 行目末尾の tsaoil の母音は /e:/ と発音しなければ韻律が成立しない。<sup>11</sup>ところが、これはコナハトでは通常 /i:/ の母音で発音される語である。にもかかわらず、たとえコナマラの歌い手であっても、ここはマンスターの発音 /e:/ に合わせて唄う。この歌がマンスターで作られた詩の韻律を有しているからである。とはいえ、韻律に関係しない部分はコナマラの発音が用いられることが普通である。

アイルランド語強勢詩は強勢拍リズムによって詩行の骨組みが刻まれ、各行の句境界を母音韻が補強する構造を有する。アイルランド語強勢詩は目で読むのではなく耳で聴くことが受容の主形態であるから、聴感上のまとまり(=句)を聞分けることは必須の要件である。その意味で、句末の母音韻が成立しない事態(=自らの方言発音によって母音の発音を変える)は避けなければならない。<sup>12</sup>

この詩は、詩脚内リズムは基本的に 3 拍子である。各詩脚は強勢のある短母音と無強勢の短母音 2 つ、または強勢のある長母音(または二重母音)

11 tsaoil は saol (世、人生) の属格に定冠詞が附いて暗音化した形。

12 ただし、韻律に意識的でない(若い世代の)歌い手の中には、この種の母音韻を無視して自方言の発音で唄う例もある。

と無強勢の短母音1つとから成る。行末の詩脚は強勢のある長母音1つから成る。5強勢詩行に共通のこととして、(1)詩脚内リズムが3拍子、(2)行末詩脚が1音節、(3)4行連、(4)第2詩脚と第3詩脚間に句境界をはさむアキル、(5)行末詩脚の母音韻が必須、の5つの特徴がある。<sup>13</sup> 本詩は殆どその特徴を満たしているが、特徴(4)は引用第3-4行にしか当て嵌まらない。アキル (aicill) は、この場合には句と句とを結ぶ紐帶的母音韻である。例えば、引用3行目の rithfead と fuinneamh の強勢母音 /i/ がアキルを成している。引用第1-2行の第4詩脚に(垂直的)母音韻があるが、この第4詩脚などに現れる母音韻は境界を示す役割を負っていない(=句末の位置にない)ため、必須のものではない。逆に、行末詩脚の母音韻は必須であるため、tsaoil の母音は /e:/ と発音しなければならない。

マンスター方言の特徴は発音面だけではなく、引用第3-4行に現れる chifead, rithfead, clúdód といった動詞の形にも表れている。これらはいずれも1人称単数の未来形で、人称語尾の附く形(複合形)である。コナマラなら、人称代名詞を添えて feicfidh mé, rithfidh mé, clúdóidh mé となるところである。<sup>14</sup> いかにコナマラ方言を話す人でも、このように活用形まで変えてしまえば、音節が1つ増えることになり、詩歌として成立しなくなる。

### 4.3 17世紀以降の詩の例

文献上、遅くとも、17世紀の詩から「歌(amhrán)の韻律」(強勢詩の代表的な韻律群の総称)が確認できる。その中で、韻律上の母音韻 /e:/ が綴り字 ao に対応している例を2つ挙げる。いずれも、韻律がなければコナハト人は /i:/ と発音するであろう事例である。

17世紀のレンスター地方オスリー出身の Brian Mac Giolla Phádraig 神父作と推定されている詩 'Faisean chláir Éibhir' の第3連を引く。<sup>15</sup>

Is | cor do | leag mé : | cleas an phlás | tsaoilse:  
 | mogh in gach | teach : ag | fear an smáil | Bhéarla  
 's gan | scot ag | neach : le | fear den dámh | éigse  
 ach | 'hob a | mach : 's beir | leat do shár | Ghaelgsa'.<sup>16</sup>

13 菱川 英一、「詩における句の考察——アイルランド語の4強勢詩行」、『今を生きるケルト』(英宝社, 2007 [印刷中])。

14 feic (見る) の1人称単数現在形は、コナマラで feicim, マンスターで chím など。

15 当時のレンスターでの ao の発音については、確たる根拠となる資料が不足しているが、この詩は /e:/ の発音であったことを強く示唆する貴重な材料といえる。オラヒリーは /e:/ 音の北限はダブリン県とキルデア県北部と推定している。O'Rahilly 27-28.

(-) | o - | a - | a - á | é -<sup>17</sup>

It's a trick that knocked me down [with] the trick of the deceit-world:  
the man of the gloomy English [has] a servant in every house  
and one has no scot for a man of the bardic company  
but 'get out and take with you your excellent Irish'.

邪な世の変転で私は眨められた。

穢れた英語の家には必ず召使あり

もはや詩人には割前はなく

「結構なアイルランド語を抱えて出てゆけ」と言われるのみ。

4強勢の詩行4つから成る連である。各行は2句から成り、句境界は第2詩脚にある。詩脚内リズムは変則的な3拍子である。第1、第2、第4詩脚は2音節で、第3詩脚のみ3音節である。

各行の第2詩脚と第3詩脚の強勢母音は /a/ で、句境界をはさんでアキルを成す。第1詩脚と第4詩脚は（垂直的）母音韻で、それぞれ /o/ と、 /e:/ の強勢母音である。この /e:/ の母音韻は引用1行目の第4詩脚の第1音節の綴り字 aoi に対応する。従って、誰であってもこれは /e:/ と発音せねば韻律が成立しない。ここの tsaoilse は saol の属格が暗音化した形で、前述の 'Jimmy mo Mhíle Stór' の第1連2行目と同様の場合である。<sup>18</sup>

次に、17世紀のマンスター地方ティペレアリー県出身の Séathrún Céitinn 神父（英名 Geoffrey Keating）の詩 'A bhean lán de stuaim' の第7連を引く。

A | fhinnebhean | tséimh | shéaghanta | shárchaoin | tsuairc  
na | muirearfholt | réidh | raonfholtach | fá a ndíol | gcuach,  
is | iongnadh an | ghné | thaomannach | fhásaíos | uait;  
gé | doiligh an | scéal, | tréig mé agus | táig dhíom | suas.<sup>19</sup>

16 Pádraig de Brún, Breandán Ó Buachalla, Tomás Ó Concheanainn, *Nua-Dhuanaire*, cuid 1 (1971; Baile Átha Cliath: Institiúid Ard-léinn Bhaile Átha Cliath, 2002) 11.

17 仮に、第3詩脚を3音節でなく2音節とし、第4詩脚を3音節にした場合には、その第4音節の第2音節はいわゆる「前方強勢」(forward stress) と看做される。第2音節以降の長母音等に発生する強勢である。cf. Brian Ó Cuív, "Metrics and Irish Phonology," *Occasional Papers in Linguistics and Language Learning*, No. 6: *Papers in Celtic Phonology*, ed. Ceinwen H. Thomas (Coleraine: The New U of Ulster, 1976) 120; O'Rahilly, 86, 90, 92.

18 語尾の -se は強調を表す接尾辞と解する。

(-) | \*i - - | é | é - - | á í | ua<sup>20</sup>

Fair woman, slender, noble, most gentle, pleasant,  
of the luxuriant locks, smooth, of falling long hair, enough for cuckoos,  
the moody grown kind from you is a wonder,  
although it is a difficult matter, abandon me and let me alone.

細く高貴で淑やかで愛すべき美しいお方  
カッコーが巣を作るほどのたっぷりした流れる髪をお持ちのお方、  
気まぐれ放題にお伸ばしになったのは驚くべきことです。  
無理を申しますが、私のことはどうかお構いなきよう。

全部で8連ある詩である。一般に詞華集などに採られているのは第6連までであるが、ここに引いた箇所を含む第7-8連のみ、「歌の韻律」で作られており、この跋のような連のことを‘ceangal’または‘amhrán’と呼ぶ。<sup>21</sup> 作者はアイルランド史 *Foras Feasa ar Éirinn* の著者としても知られるが、アイルランド語詩史の観点からは、当時としては「新しい」詩法である強勢詩の韻律を詩の中に多く用いた最初の文人の一人として重要とされる。<sup>22</sup> 当初は、いわゆる *bardic school* の訓練を受けた詩人たちは音節詩と強勢詩を一つの詩の中で混用していた。

5強勢詩行4つから成る連である。5強勢詩行は前述の通り、(1)詩脚内リズムが3拍子、(2)行末詩脚が1音節、(3)4行連、(4)第2詩脚と第3詩脚間に句境界をはさむアキル、(5)行末詩脚の母音韻が必須、の5つの特徴を有するが、本詩ではすべて満たされている。

このうち(4)のアキルは本詩では /e:/ の母音韻であり、引用2-3行目で綴り字 *ao* に対応している。仮にコナハト人が読んでもここは /e:/ と発音せざるを得ない。

19 *Nua-Dhuanair*e, cuid 1, 16. 引用2行目 *fá a ndíol gcuach* は regarding their [locks'] sufficiency of cuckoos と解する。同3行目 *fhásaíos* は a *fhásas*, a *fhásann* (that will grow, that grows) の意 (*Nua-Dhuanair*e, cuid 1, 99)。同4行目前半は *gé doiligh an scéal* [é] と解する。後半の *táig* は *tóg* に同じ。

20 /\*i/ は非円唇短母音 (an *gairid neamhchruinn*)。 *Nua-Dhuanair*e I-III (1971-1978) の編者たちが採用した表記。 *Tadhg Ó Donnchadha* (1925) の用いた /ü/ に同じ。

21 詩本体の後に附され、それまでの連の内容をまとめたり、他人に助言を与えたり、神の加護を願ったりする。頓呼法的になったり、教訓的になったりする。韻律は、引用詩のように、本体とは違うものになることが多い。

22 強勢を組織化の原理とする詩は、実はきわめて古くからあり、この時点の少なくとも千年前から作られている。が、7-17世紀の間は、音節詩が支配的であった。

各行の第4詩脚は二重修飾韻になっており、第一強勢の /a:/ の母音韻の後に、第二強勢の /i:/ の母音韻があるが、引用1行目と3行目の場合は前方強勢と看做せる。

以上、綴り字 ao が韻律上 /e:/ と発音されなければならない例を確認したが、この種の例では、歌い手あるいは朗誦者の方言にかかわらず、発音する者が韻律を意識していれば、元の詩歌の韻律保持が優先されると言える。

## 5. 口承詩の典拠

最後に、本論で挙げた事例にかかわる口承詩の典拠の現状について少し触れる。

歌で特殊な（古い）発音が保持されるのは、本論で見た通り、口承詩においては珍しいことではない。ただし、現在では正確な歌詞の保持は、かつてのような炉辺での口伝えではなく、正確な歌集に依存している。これは、ゲールタハト（アイルランド語使用地域）の最深部においても同様である。

コナハトの歌い手が用いる主要歌集を原典の出版年代順に4点挙げる。

- (1) Ó Máille, Micheál agus Tomás. *Amhráin Chlainne Gael*. 1905. Eag. William Mahon. Eagrán nua. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1991.
- (2) Bean Mhic Choisdealbha, Eibhlín. *Amhráin Mhuighe Seóla*. 1923. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1990.
- (3) Ó Ceallaigh, Tomás. *Ceol na nOileán*. 1931. Eag. William Mahon. Eagrán nua. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1990.
- (4) Ó Cadhain, Máirtín. *Faoi Rothaí na Gréine*. Eag. Ríonach uí Ógáin. Baile Átha Cliath: Coiscéim, 1999.

それぞれの文献について簡潔に解題を行う。

### 5.1 *Amhráin Chlainne Gael* (1905)

収録歌全76篇の大部分に当たる66篇は、Ó Máille兄弟ではなく、Tomás Breathnach (Dubhachta, Corr na Móna) が収集した。Corr na Móna はゴールウェー県北部のゲールタハトである。<sup>23</sup> そのあたりは一般には Dúiche Sheoigheach (英名 Joyce Country) として知られるが、その地域およびコナ

23 2006年現在、アイルランドのゲールタハト担当大臣 Éamon Ó Cuív (アイルランド初代首相 Éamon de Valera の孫、アイルランド語学者 Brian Ó Cuív の息子) の居住地。

マラ地域の歌が集められている。

編集方針について、William Mahon（ハーヴァード大学ケルト学部）は次のように書く。

Is soiléir go mba mhian le Michéal [sic] agus Tomás Ó Máille radharc a thabhairt don léitheoir ar thréithre is ar shaibhreas Ghaeilge Chonamara ó thuaidh. D'fhág siad foirmeacha na canúna i mórchuid den téacs agus sholáthraigh siad nótaí a thabharfadh eolas orthu sin, ar údair na n-amhrán, is ar sheanchas na háite.<sup>24</sup>

この結果、歌の本文には標準綴りである chonaic（動詞 feic「見る」の過去形）の代わりに choinic などの形が保持されており、それについて註釈や巻末の語彙集で説明されている。語句の説明のみ、概ね英語で与えられている。

## 5.2 *Amhráin Mhuighe Seóla* (1923)

収録歌曲80種。一つの歌に数種類のヴァージョンを集めている場合があり、歌の数としては全73篇。主として著者 Eibhlín Bean Mhic Choisdealbha（英名 Mrs. Costello）が住むゴールウェー県北部 Tuaim 周辺の歌を、多くは曲も共に、歌い手から直接聴き取って集めたもの。多くは Malachy Eaton 神父による散文の英訳が添えられている。1923年 は書籍版の刊行年であり、その前に1918年に *Irish Folk Song Society Journal* 第16巻に掲載されている。実際の歌の聴き取りと記録の方法について貴重な証言を著者は記す。

It was my practice to listen to the whole of the song first, then to write down one or two verses, and learn the air on those, paying particular attention to phrasing and tempo. Afterwards I had to hear the whole song again until I was satisfied that I had caught both the air and the emphasis on the words exactly as the singer rendered them. With the simpler songs this was sufficient. I then played it over, wrote down the notes, assigned the words to them exactly as the singer gave them, and finally barred it according to the emphasis. This I found the most difficult part of my

24 *Amhráin Chlainne Gael*, xi. 大意——コナマラ北部のアイルランド語の豊かな特徴に読者の目を拓こうと編者たちが努めたことは明らかである。テキストの大部分において同方言の形を残し、註釈においてその方言、歌の作者、〔唄われる〕土地の説話について説明した。

work, for in each case I had to give first importance to the words, as the singer himself does. To him the air is only the medium of conveying pleasantly to his audience the story he has to tell, and he will even frequently break off in the middle of a fine phrase to explain some difficulty in the verse.<sup>25</sup>

この一連の工程で最も難しいのは楽譜で小節に分ける縦線を附すところと書く。これは言葉の **emphasis** (強調、強勢) を正確に聴き取れているかどうかに関わり、韻律分析における詩脚の決定に似る作業である。つまり、縦線を附す箇所は基本的に強勢の直前である。

強勢の位置がはっきり判って初めて **phrasing** (句切り法、楽句の組立て) が把握できる。本書の楽譜のあちこちに、この **phrasing** を示すかのようなスラーが音符に附されている。楽句と韻律上の句とは関連しており、句末の強勢母音による母音韻がはっきり聞き取れるためにも小節 (= 強勢位置のマーカー) が正確に区切られていなければならない。

一連の工程で最も重要なのは詩の言葉とその強勢の正確な記録であり、旋律はそれを載せる媒体に過ぎないと著者は看做す。同じ歌詞でも違う旋律で唄われる場合も珍しくないから、まず記録すべきものは詩の言葉である。強勢詩が強勢詩として成り立つことが最大の眼目であり、旋律はその詩を聴衆に届ける役目を果たす。

### 5.3 *Ceol na nOileán* (1931)

収録歌全77篇。コナマラ島嶼部などの歌をゴールウェー大学教育学部教授 Tomás Ó Ceallaigh 神父が集めたもの。歌と歌い手とについての巻末註を附したのは Mícheál Ó Craidhin である。

1990年版の編集を担当し、本文に脚註を附した William Mahon は、原典の言語の特徴と校訂方針についてこう書く。

Bhí úsáid na dtuislí níos láidre ní mór [sic] a bheadh súil leis i gcaint na ndaoine, fiú amháin in amhráin. Bhí foirm an tuisil thabhartaigh, mar shampla, slán sábháilte i ngach áit. Cé [sic] hionadh seanleaganacha seargtha mar *mnaoi agus caillí* a chloisteáil in amhrán? Ach tá mé aimhreasach go leor faoi fhoirmeachaí eile mar *craoibh, maighdin, mnáibh, agus buaibh*; agus ní raibh aon drogall orm iad a chaighdeánú. Bhí roinnt

25 *Amhráin Mhuighe Seóla* [Preface], n. pag.

Muimhneachais ann freisin, pé'r bith cén áit ar eascair sí sin as: foirmeachaí mar fé (ina cheann le seanfhoirmeachaí Chonnachtacha mar fá agus fó), neosfainn, agus raghair.<sup>26</sup>

ここには与格について例を挙げているが、無強勢音節に関わる部分ならまだしも、強勢母音の質に関わるところを標準化しているとしたら、詩の韻律上は問題である。

#### 5. 4 *Faoi Rothaí na Gréine* (1999)

収録歌全77篇。20世紀の大作家でトリニティ・コレッジ教授 Máirtín Ó Cadhain が、生地コナマラの An Spidéal, Camas, Ros an Mhíl 地域の歌を集めたもの。その小説 *Cré na Cille* はアイルランド国内はもとより国際的にも著名である。

基礎的な編集は殆ど弟の Seosamh Ó Cadhain が行い、最終編集はユニヴァーシティ・コレッジ・ダブリン民俗学部資料館の収集官 Ríonach úi Ógáin が行った。彼女は編集方針を次のように記す。

Níl aon athrú suntasach déanta anseo ar na bun-lámhscríbhinní, cé is moite den litriú a bheith tugtha chun rialtacha. Sna leaganacha easnamhacha cuireadh línte as leagan eile faoi lúibíní cearnacha [ ], nuair ab fhéidir a theacht ar a leithéid. Sa chéad líne den fhonóta atá le teideal gach uile amhrán, tugtar foinsí eile don amhrán nuair is ann dóibh as cnuasach na gCadhach [. . .]. I gcás nach luaitear aon fhoinsé den chineál sin, is i lámhscríbhinn i seilbh phríobháideach amháin a bhí fáil ar an amhrán. Sa chás go raibh malaírt leagain ábhartha le fáil sna foinsí thuas, tá tagairt tugtha sna fonótaí.<sup>27</sup>

26 *Ceol na nOileán*, vii. 大意——口語において予想されるよりも強く格が使用されている。例えば、与格は全く問題なくどこでも使われた。mnaoi や cailli といった衰退した形が歌で聞かれたとして何の驚きがあろう。とはいえ、craoibh, maighdin, mnáibh, buaibh などの形には私は懐疑的であり、標準化することに躊躇はなかった。どこから来たにせよ、マンスター語法もあった。例えば（コナハトの古い形である fá や fó と並んで）fé のような形や、neosfainn, raghair など。

27 *Faoi Rothaí na Gréine*, 5. 大意——手稿原本には特に変更を加えていない。ただし、綴りは一貫するよう整えた。不完全なバージョンの場合、他の典拠が見つければ、角括弧 [ ] に入れて詩行を補った。各歌の題に附した脚注の最初に、オカイン兄弟の収集以外の典拠がある場合には、それを記した。そのような言及が全くない場合は、その歌は個人所有の手稿にのみあることを意味する。関連するバージョンに相違点がある場合には、その典拠に言及した。

この方針は実際、堅持され、各歌の異同等に関する典拠は綿密に精査されている。

以上、瞥見した4種の歌集はいずれも、それぞれの地域の歌約80篇を収めているが、アイルランド伝統歌の数はこのようなものではない。一地方につき数千はあると目され、アイルランド全体では数は45,000に上るとする民俗音楽学者の推計がある。ヘブリディーズ諸島を除けば、アイルランドは北半球で最大規模の伝統文化を有するとする説もある。

### 引用文献

- Bean Mhic Choisdealbha, Eibhlín. *Amhráin Mhuighe Seóla*. 1923. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1990.
- de Bhaldraithe, Tomás. *The Irish of Cois Fhairrge, Co. Galway*. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 2002.
- de Brún, Pádraig, Breandán Ó Buachalla, agus Tomás Ó Concheanainn, *Nua-Dhuanaire*, cuid 1. 1971. Baile Átha Cliath: Institiúid Ard-léinn Bhaile Átha Cliath, 2002.
- Hishikawa, Eiichi. (菱川 英一). 「詩における句の考察——アイルランド語の4強勢詩行」, 『今を生きるケルト』. 東京: 英宝社, 2007 [印刷中].
- Ó Cadhain, Máirtín. *Faoi Rothaí na Gréine*. Eag. Ríonach uí Ógáin. Baile Átha Cliath: Coiscéim, 1999.
- Ó Ceallaigh, Tomás. *Ceol na nOileán*. 1931. Eag. William Mahon. Eagrán nua. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1990.
- Ó Ceannabháin, Peadar. *Mo Chuid den tSaol*. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1997.
- Ó Con Cheanainn Ciarán. Amhránaíocht. Áras Mháirtín Uí Chadhain, An Cheathrú Rua. 15 Lúnasa 2005.
- Ó Concheanainn, Tomás. *Nua-Dhuanaire*, cuid 3. Baile Átha Cliath: Institiúid Ardléinn Bhaile Átha Cliath, 1981.
- Ó Cuív, Brian. “Metrics and Irish Phonology,” *Occasional Papers in Linguistics and Language Learning, No. 6: Papers in Celtic Phonology*. Ed. Ceinwen H. Thomas. Coleraine: The New U of Ulster, 1976. 108-123.
- Ó Donnchadha (Torna), Tadhg. *Prosóid Gaedhilge*. Corcaigh agus Áth Cliath: Cló Ollsgoile Chorcaighe, 1925.
- Ó hUiginn, Ruairí. “Gaeilge Chonnacht,” *Stair na Gaeilge*. Eag. Kim McCone

- et al. *Maigh Nuad: Roinn na Sean-Ghaeilge*, Coláiste Phádraig, 1994. 539-609.
- Ó Máille, Micheál agus Tomás. *Amhráin Chlainne Gael*. 1905. Eag. William Mahon. Eagrán nua. Indreabhán: Cló Iar-Chonnachta, 1991.
- O'Rahilly, Thomas F. *Irish Dialects Past and Present*. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1976.